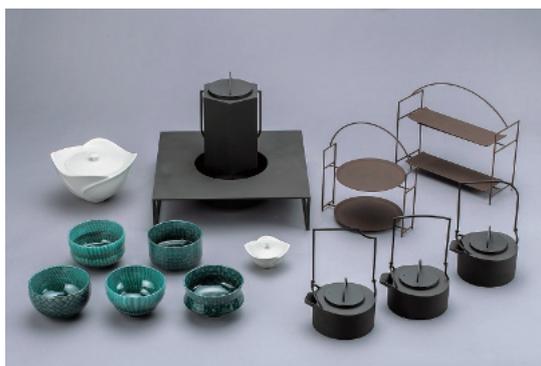


特別展「食を彩る工芸」



「食を彩る」(右上)
(多田幸史、見附正康、水口咲、中嶋武仁)
「一献傾ける」(左上)
(中田博士、宮本雅夫、田中義光、中嶋武仁)
「喫茶の嗜み」(左下)
(中田博士、宮本雅夫、坂井直樹)
—特別展「食を彩る工芸」展 第2部より—
(撮影 濱崎敏彦)

- 加賀藩の美術工芸／前田家と能【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 石川県の寺宝／石川県立美術館の能面コレクション【古美術】
- 彫刻家たちの研鑽【近現代彫刻】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】
- よろこびのかたち【近現代工芸】
- かな・方寸の美【近現代書】

- 12月の行事予定
- 学芸室こぼれ話
- アラカルト ただいま展示中

前田育徳会尊經閣文庫分館

加賀藩の美術工芸

11月9日(土)~12月8日(日) 会期中無休

企画展(第7・8・9展示室)

特別展「食を彩る工芸」

主催/石川県立美術館 共催/北國新聞社
後援/NHK金沢放送局、MRO北陸放送、テレビ金沢
HAB北陸朝日放送、石川テレビ放送

11月9日(土)~12月8日(日) 会期中無休

本展覧会は、加賀藩政期時代から現代までのいしかわの食と工芸を紹介する第1部と、現在活躍する工芸作家による新たな食を彩る作品を紹介する第2部の、2部構成となっています。

第1部は、「もてなす心」、「自然を尊ぶ」、「菓子を愉しむ」という3つのトピックを掲げています。「もてなす心」では、年中行事やハレの日に登場する特徴的な食器や飾りを、「自然を尊ぶ」では季節ごとの自然を楽しむための道具類を、「菓子を愉しむ」では「茶どころ・いしかわ」として茶と菓子とその器をそれぞれ紹介しています。

第2部では、石川県を拠点としつつ国内外で活躍する、多田幸史、中田博士、見附正康、宮本雅夫(以上、

前号では本展の展示内容の概要についてご説明しました。今回はその中から「将軍が描いた絵画作品」に焦点を絞り、ご紹介いたします。徳川家歴代将軍は、武芸の習得に限らず、書や絵画など学芸の修業にも努めていました。歴代将軍の多くは、御用絵師をつとめる狩野派の絵師たちに師事し、狩野派の画学習に沿って絵師による指導が行われたと考えられます。

将軍の御筆(将軍自筆の書画)は、代替わりの際に子息やその正室に贈り、将軍職の継承を象徴するほか、天皇への贈答品や家臣への下賜品として用いることで、関係性を強化するはたらきもあつたようです。江戸幕府が編纂し大名諸家の家伝や家譜を収録した『寛政重修諸家譜』には、加賀藩5代藩主・綱紀

陶芸)、田中義光、水口咲(以上、漆芸)、坂井直樹(金工)、中嶋武仁(木工)の8名の作家による「食」をテーマとした新作を紹介しています。食の場を想定し、大皿、小皿などを組み合わせた「食を彩る」、酒の味わいを感じるために手になじみ、香りを伝え、宴を豊かにする酒器を集めた「二献傾ける」、茶碗からアフタヌーンティースタンドまで、和洋の喫茶道具をそろえた「喫茶を嗜む」の3つの場面をしつらえました。各作家の作風を発揮していただきながらも、そこには器に対するそれぞれの想いやこだわり、工夫が反映されています。



角俣三郎《片口「よい波」》加賀屋蔵(ほか)
(撮影 濱崎敏彦)

が5代将軍・綱吉より「牡丹に小鳥」の御筆を賜ったことが記録されています。

実際の絵画作品を見てみましょう。3代将軍・家光が描いた《魚狗図》です。魚狗とはカワセミのことで、その特徴である長いくちばしを、やや誇張気味に表しています。生息地を考えると葦でしょうか、垂直に伸びる線の上にとまる姿を描いています。ややかすれ気味な筆跡と真つ黒な目は、ほかの家光の作品にも見られる特徴です。

素朴で愛らしく、親しみ深ささえ感じられる「将軍が描いた絵画作品」。将軍の日々の暮らしに思いをはせながら、ご覧いただければ幸いです。



徳川家光《魚狗図》

彫刻家たちの研鑽

11月9日(土)~12月8日(日) 会期中無休

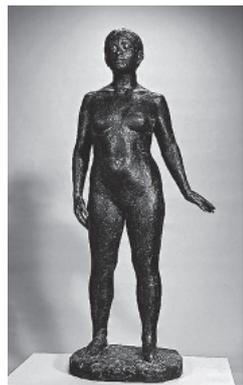
木村珪二、畝村直久、堀義雄、石田康夫の4人の彫刻家たちの作品から、彫刻家たちが求めた美のすがたと研鑽の道をたどる本特集展示。今回は堀義雄、石田康夫の2人の作品をご紹介します。

堀義雄は自己の内部に迫ることや人間の性器をモチーフに生命の源泉、営みを主題とした唯一無二の造形世界を展開しました。中でも《転生》は堀義雄の代表作といえる作品の一つです。有機的な乾漆彫刻の中に、女性という存在、そして人間の内なる世界を表現しています。

一方、石田康夫はシンプルながら量感や生命感に満ちた裸婦像を多く制作しました。そこには、人間の本质や内面の美を具象彫刻によって追い求めるというテーマがありました。今回紹介する《海》は飾り気



堀義雄 《転生》



石田康夫 《海》

なく静かに立つ裸婦像です。「今一度、人間の存在について考えてみた」という本作は、モデルに内面の美を見出し、絶えず人間の本质の表現を探った作者にとって、原点に立ち戻った作品といえるでしょう。

人体をモチーフとしながら、2人の希求したものとそれを表現するための方法は大きく異なります。ここで紹介した作品を含めた彫刻家たちの作品から、作家が求めた美のすがたと歩んだ道のお楽しみください。

石川県の寺宝

11月9日(土)~12月8日(日) 会期中無休

前号では、本展の概要を簡単にご紹介いたしました。今回は出展作品のうち、總持寺祖院所蔵の石川県指定文化財《十六羅漢図》について掘り下げてみましょう。ここに描かれる十六羅漢とは、16人の阿羅漢(羅漢)のことで、「阿羅漢果」という最高位にあたる人物を指し、人々の尊敬と供養を受けるに値する人物とされます。日本における現存最古の十六羅漢図としては、京都市の清涼寺が所蔵する国宝《十六羅漢図》が有名です。東大寺の僧・翕然によって宋よりもたらされ、その後の羅漢信仰に影響をもたらしました。

現在展示中の總持寺祖院所蔵《十六羅漢図》を見てみましょう。各幅の中央に羅漢が一尊ずつ威厳ある姿で描かれます。羅漢の尊容だけでなく、細やかに彩色された衣服や周囲に描かれた調度品も見どころ

です。十六幅のうち、十二幅が光明寺(神奈川県鎌倉市)所蔵の《十八羅漢図及び道宣律師像》と図像が完全に一致します。ほかの四幅のうち龍をなでる第八尊者・伐闍羅弗多羅が、神照寺(滋賀県長浜市)の滋賀県指定文化財《十六羅漢像》の第八尊者と全く同じ図像で表されます。また、第十尊者・半託迦が柄香炉を持つ姿は、神照寺本の第十尊と近く、第十尊者の足下に描かれた薬研を使う童子は、同じく神照寺本の第十四尊者・伐那婆斯の足下に表された童子と近似しています。このように本作は、複数の形式をもった図像が含まれる珍しい作例とされています。



石川県指定文化財《十六羅漢図》のうち第八尊者・伐闍羅弗多羅 總持寺祖院所蔵

前田家と能

12月14日(土)~2月3日(月)
12月29日(日)~1月3日(金)は休館

江戸時代の能は、武家の行事に欠かせない「式楽」として発展しました。「加賀宝生」という言葉で知られるように、加賀藩前田家は宝生流の能が盛んでしたが、藩主たちは、どのように能と関わってきたのでしょうか。今号と次号の美術館日よりでは、展示する作品について詳しく紹介します。

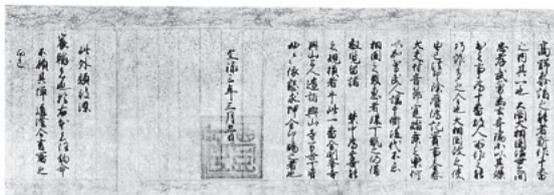
武家が能に関わるきっかけをつくったのが、豊臣秀吉です。能を愛好した秀吉は、観世・金春・宝生・金剛という四座の能役者たちを支配しようとしただけでなく、自ら演じることを好み、また自らを主人公とした能をつくりました。これら新作能は「豊公能」と呼ばれています。

今回展示する《高野参詣》は、豊公能のひとつです。秀吉が、文禄3年に吉野から高野山へ向かい、大政所

の三回忌を行うのにあわせてつくられました。法要のあと成仏した大政所が現れて、秀吉を称えるという内容で、秀吉がひいきとした金春流の能役者が、高野山の青巖寺門前で演じたとされています。

この時、高野山青巖寺に奉納されたのが、この謡本です。題箋は後陽成天皇の宸筆、本文は聖護院門跡道の澄の筆によります。たいへん華麗な謡本で、全体に金の切箔を散らし、野線には銀泥が用いられています。謡本はのちに高野山天徳院へ移り、5代藩主前田綱紀の手に渡りました。巻末には、大きく「豊臣」の朱印が捺されています。

《高野参詣》は、昭和62年以来、37年ぶりの公開です。



《高野参詣》(巻末)

優品選

11月9日(土)~12月8日(日) 会期中無休

日本画では、晩秋を彩る季節の優品に加え「太古」を想う作品を5点展示します。上田珪草《埴輪》は、4体の埴輪が生あるもののように群像的に描かれています。埴輪は古墳時代の副葬品であり、いわば黄泉の世界のもですが、作者はそこへ亡き妻への追悼と感謝を込めて制作しました。「表情もよく似ている」とは家族からの評です。

油彩画は、画家・円地信二が長女と人形をテーマとした連作のひとつ《彼女と人形》を展示します。渦巻くような背景の処理と人物の配置、チューブからそのままキャンバスに絵具を出す独特の描法が、作者の画面を効果的に特徴づけています。ことなく柔らかなタッチから、娘への暖かい愛情が漂ってくる作品です。

素描・版画作品では、芸術や実りの秋など、秋をテーマに作品を展示します。草間彌生にとつて愛するモチーフであったかぼちゃ。草間は立体、平面を問わず網目や水玉を多用したかぼちゃの作品を手掛けています。今回はシルクスクリーンで制作された版画作品をお楽しみください。

彫刻分野からは沼田一雅《栗鼠》をご紹介します。沼田一雅は彫刻、陶彫、陶芸と分野を超えて活躍しました。本作は2匹の栗鼠のすがたを細やかに捉えた作品。動物の像を多く制作した、作家の観察眼が顕著に現れています。気温も下がり冬の訪れを感じる頃ですが、過ぎ行く秋の季節に思いをはせながらお楽しみください。



円地信二《彼女と人形》

近現代工芸(第5展示室)

よろこびのかたち

12月14日(土)~2月3日(月) 会期中無休
12月29日(日)~1月3日(金)は休館

人々は古くから長寿、子孫繁栄、立身出世など様々な願いをこめて、身のまわりを飾ってきました。調度や道具、衣服を含む工芸作品には、おめでたい意味が与えられたモチーフや文様が多く登場します。本特集は、縁起のよい題材や吉祥文様による工芸作品を紹介する内容です。

このようなモチーフは、多くが中国から伝わりました。天下が太平になるとあらわれるという龍、鳳凰、麒麟、亀は四瑞しじゆと呼ばれ、吉祥の前兆とされています。塚谷竹軒《赤絵金彩龍鳳凰図瓢形大徳利》は、高さ約33センチの大きな徳利。龍と鳳凰が絢爛な色彩で描かれています。

中国四明山しめいざんの僧である布袋ぼだいは、禅味に富むその様子から、古くから作品のテーマとなってきました。日

本では江戸時代以来、七福神の一人としても数えられています。山田宗美《鉄打出布袋置物》は、大きな袋に寄りかかり柔らかな笑みをたたえる布袋が、鉄打出であらわされています。

植物にも縁起がよいとされるものが多くあります。冬の寒さに耐えながら生き生きと茂る歳寒三友(松、竹、梅)、文人たちが愛した四君子(蘭、竹、梅、菊)、百花の王と呼ばれる牡丹などは、おめでたい植物の代表的な存在です。本展では、松田権六や初代笹田月映、寺井直次らがこれらの植物をあらわした優品を展示いたします。

このほかにも、登龍門や蓬萊山、宝尽しに童や鳥など、縁起のよい作品を集めました。華やかな世界をお楽しみいただければ幸いです。



山田宗美《鉄打出布袋置物》

古美術(第2展示室)

石川県立美術館の 能面コレクション

12月14日(土)~2月3日(月) 会期中無休
12月29日(日)~1月3日(金)は休館

石川県立美術館には、40面の能面が所蔵されています。そのほとんどが加賀藩前田家伝来ですが、これまで特集展示としてまとめて紹介することはありませんでした。今回まとめて25面を展示します。2年ぶりの公開となる重要文化財《緑地桐鳳凰模様唐織》とあわせてお楽しみください。

能面は、シテの役柄に応じて用いられます。老若男女だけでなく、この世に存在しない鬼神、妖精、亡霊をあらわします。さらに男女面は、年代や品格によって数種類あり、その流派でのみ用いられる専用面もあります。今回の展示では、その違いや種類をわかりやすく紹介します。

まず《小面》こおもてを思い浮かべる人が多いと思います。

まだ若い女性をあらわす能面です。額から毛筋が3本流れています。その《小面》より少し年を経た女性の面が《孫次郎》で、金剛流の専用面とされています。金剛太夫孫次郎が、亡き妻の姿を思いながらつくられたといえます。《増女》ぞうおんなも少し年を重ねた女性をあらわしており、《小面》に比べると、ほほの肉が落ちていることがわかります。

老人をあらわす尉面は、口ひげやあごひげが植えられているか、描かれているかによって、品格が異なります。もつとも品格の高い尉面が、描かれた口ひげを持つ《小尉》こせうです。神性のある役柄に用いられます。その《小尉》に植えた髭を加えたのが、《髭小尉》で、少し劣ります。《朝倉尉》は庶民の役柄に用いられます。



《孫次郎》是閑

優品選

12月14日(土)～2月3日(月) 会期中無休
12月29日(日)～1月3日(金)は休館

日本画は11月に引き続き展示する「太古を想う」に加え、「冬の景」「ハレを飾る」をテーマに展示します。「冬の景」には、大正期の正月準備の様子がかがえる《八百屋之図》を展示。店先での女将さんとお使いの少女のやり取りがほほえましい美人画です。「ハレを飾る」では、ちよつとめでたい日本画をご鑑賞ください。

ご注目いただきたい油彩画のうち、南政善《蝙蝠》は、浅草の翫間を題材とした作品です。中国では蝙蝠の「蝠」が「福」につうじ、福の神の使いであり、吉兆の印とされます。本作では浅草の翫間が座敷芸の蝙蝠の舞を踊る姿が描かれています。機敏に捉えられた翫間の仕草には、「翫間」という商売はすでになくなっていると感じていたから、本格派の翫間を見られたよるこびは大変なものだ。踊る動作がじつにおもしろい。



宮本三郎《舞妓十二題 松の内》

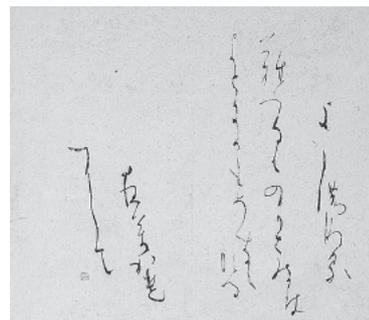
かな・方寸の美

12月14日(土)～2月3日(月)
12月29日(日)～1月3日(金)は休館

日本人はもともと文字を持たない民族でしたが、漢字発祥の地である中国との外交的な関係構築のために文字文化の進展が促されました。日本人は漢字の音を借りて、一字一音の表記で「かな」を生み出しました。当初は、漢字の楷書の姿で書かれた「かな」ですが、平安時代に入り草書を参考に書き崩されます。やがて日常生活の手紙をはじめ、日本人がうたい口ずさんだ詩歌、物語や随筆、その他の文字を書き記すための文字としてかな書の盛行が進みました。平安中期以降、一字一字切り離して書いていた単体の「かな」は、実用の度を増すことに、連結させて用いることにより、流麗な連綿と呼ばれるつづけ書きの筆線を生み出します。また、行頭、行末、行間をあえてそるえず、時に行を傾けて書く散らし書きなども生み、かな

な芸術は完成していきました。その後「かな」は、江戸期まで実用色の濃い御家流を中心とした書風が続きました。そして明治時代になると、欧米文化を尊重するあまり顧みることがなかった日本古来の文化が見直され、「かな」も平安時代に完成した和様の書風の上代様を範とする動きが始まり、新たな時代のかな書を生み出していくのでした。

戦後は建築や生活様式が西洋化する中、日展に書の部門が設けられ、「かな」も細字中心の机上芸術から壁面芸術へと、大字かなを生み出し大きく飛躍していきました。今回の展示では、新たな時代に相応しい芸術を目指して模索していった現代かな書をご紹介します。



日比野五鳳《かも》

第7・8・9展示室

再興第109回院展 金沢展

12月13日(金)～26日(木) 会期中無休

日本美術院は岡倉天心らの呼び掛けにより1898(明治31)年、横山大観をはじめとする日本画家26人が集まり創設されました。近代日本画の歩みでは日展とともに、巨大な足跡を築いてきています。

金沢への巡回は2021年以来、3年ぶりです。日本画壇を牽引する日本美術院の同人たちによる101点の秀作が公開されます。

金沢展では今年度の文化勲章を受章された田渕俊夫理事長の「遠い思い出 灼熱の詩」をはじめ、地元作家で奨励賞を受けた谷善徳さん(金沢市)の「海へ」、下田義寛さん(滑川市出身)の「朝陽富士」などが展示されます。

主催／日本美術院、北國新聞社、石川県立美術館、一般財団法人石川県芸術文化協会

後援／石川県、金沢市、石川県教育委員会、金沢市教育委員会、一般財団法人石川県美術文化協会、NHK金沢放送局、北陸放送、テレビ金沢、金沢ケーブル、エフエム石川、ラジオかなざわ、ラジオこまつ、ラジオななお

◆観覧料

	当日	前売り	団体
一般	1,000円	900円	800円
高校・大学生	600円	500円	400円
小・中学生	400円	300円	200円

※団体は20名以上

※当館友の会会員は割引になります

◆連絡先

北國新聞読者サービスセンター

電話・076-260-8000(平日10時～18時)

12月の行事予定

■土曜講座「石川県立美術館の能面コレクション」

日時 12月14日(土) 13:30～15:00

講師 村上 尚子(学芸専門員)

会場 石川県立美術館講義室

聴講無料、申込不要

学芸室こぼれ話

奈良 竜一(学芸第一課学芸主任)
「作品をしつかり点検」

展覧会で作品を他所からお借りして展示する場合は、学芸員がしっかりと点検してから、県美に運び入れます。思い出深い作品点検は、令和4年に開催された巡回展の「板谷波山の陶芸」です。点検は茨城県筑西市にあるしもだて美術館で行いました。大好きな波山の作品を前に、うれしい反面、とても緊張しながら点検をしたのを覚えています。ただ、ハプニングも。しもだて美術館での点検中に、石川県で地震が発生しました。すぐに館と連絡を取り、展示をより安全な方法に変更するとともに、主催者や作品の拝借先にその旨を説明し、なんとか了解を得て開催にこぎつけました。そして展覧会が無事終了して、ホッとしました。



波山展のノベルティー

《緑地桐鳳凰模様唐織》みどりじきりほうおうもようからおり

丈145.0 裾72.3 (cm)
 桃山~江戸17世紀 重要文化財

当館所蔵の《緑地桐鳳凰模様唐織》が、国の重要文化財に指定されてから50年が経ちました。能装束のひとつである唐織は、経糸と緯糸を織りこむことによって模様を浮き出した豪華絢爛さが特徴です。重要文化財の唐織は現在8点ですが、指定された昭和49年当時はまだ3点でした。どうして本唐織は重要文化財になったのか、当時の能装束研究からふりかえってみましょう。

徳川家や池田家、細川家など、江戸時代の大名家が所蔵する能装束コレクションにはありますが、それに先行する桃山~江戸初期の能装束はめずらしく、その特徴を探る研究が続きませんでした。厳島神社の神事に用いられる能装束もよく知られており、その中のひとつが、昭和45年に「重厚な文様は、能装束の先駆を示す桃山時代の唐織」として、重要文化財になったのです。

金沢では、明治時代に金沢の能を復活させたシテ方佐野家の能面と能装束がありました。初代吉之助が私財を投じて収集したコレクションで、現在そ



のほとんどは金沢能楽美術館の所蔵となっています。

佐野家の能装束の中でも「白眉の一領」と早くから注目されていたのが、本唐織です。深い緑地に桐と鳳凰が表されています。この鳳凰の姿が、厳島神社の重要文化財の能装束にある鳳凰とよく似ているのです。優美な鳳凰でなく、くちばしや足に鋭さがあり、まるでけものような姿こそ、桃山時代の唐織の特徴をあらわしているとして、指定となりました。

今日ではもう少し時代は下り、江戸時代の初期と考えられています。

次回の展覧会

令和7年2月8日(土)
 ~3月20日(木・祝)
 会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
天神画像と文房具	浮世絵にみる 魍魎魍魎
第3・4・6展示室	第5展示室
優品選 【近現代絵画・彫刻】	特別陳列 彩塑人形・紺谷力 一躍動する生命— 【近現代工芸】

ご利用案内

コレクション展観覧料
 一般 370円(290円)
 大学生 290円(230円)
 高校生以下 無料
 ※()内は団体料金
 12月2日は第1月曜日より
 コレクション展示室無料の日

開館時間
 午前9:30~午後6:00
 カフェ営業時間
 午前10:00~午後6:00

12月の休館日は
 9日(月)~12日(木)
 29日(日)~31日(火)

石川県立美術館だより
 第494号(毎月発行)
 2024年12月1日発行
 〒920-0963
 金沢市出羽町2番1号
 Tel:076(231)7580
 Fax:076(224)9550
 URL <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。

オホーツクの海で育った天然帆立の旨味を凝縮した最高級品!

ほたて千貝柱

北海道産 ほたて千貝柱 100g入・1袋 2,480円(送料別) 2袋以上ご購入で送料無料

一口食べれば濃厚な旨味と香りがあふれ出す!

050-1869-2550 寿物産株式会社